



重修真書太閤記

五編
五



待 18
門 取 方
葉 459
卷 45

福 兼

重修真書太閤記五編卷之拾三

秀吉野口城攻の事

并加藤孫六嘉明高名の事

別所小三郎長治織田殿に背を一は族門葉を集め三
木の谷山に籠城をして羽柴筑前守秀吉是を攻
落しんが爲に大軍を發して寄來りしにも要害無雙
の城地にして容易攻難き由を計り忽ち軍勢を収
て引退し端城を攻めては是を取三木本城をしてふ
して後計策も有らしを思ひしに當國の住人小
寺官兵衛尉孝高別所孫右衛門尉重相以下案内者

同 會
攻 印

小ま川端城の繪圖を作らせ見る小三木加古印南
三郡ハ一塊の壺盧うろふて三木の山深く東ハ攝津に接
さ加古郡ハ東明石の郡不境し西ハ印南郡中不加古
川長く流きたり志賀田神吉高砂野口淡川波志谷
の城々何きを前不攻へきや今急いまひ定めた一何處
もてもあれ下知次第粉骨を盡し玉へと示しける
小寺孝高進こてらこいて當國の侍中別所わうくらひは
應おこ多く御敵とありてゆへ共何も葉武者はむしより後
後味方ごみかたありてんと思おもひ程ほどの者なくゆり但一人三木
の城中ちゆうぢゆう愛と存ぞんてるものゆひ一をハ呼出よひだし孝高
り許ゆるし止め置おきるゆ御前ごぜんへ召めれ御覽ごらんゆゆをんやと

申まをけれハ秀吉大おふ感賞かんじやうし急いそぎ對面たいめんあるへ一とて召
出だし是これをこままハ其丈六尺そのたけは餘あま里り大男おおむねの色黒く
して骨太ほねく髪かみあつく眼まなこ不ひ光ひりあり梅染うめぞめの衣服いふく着
て葛くわの袴はかまを著長つひき刀やいば短みじき刺刀さしやいば物草ものくさ脱ぬて帷幕いまく
の内うち不ひかか一いあまる秀吉熟じやく是これを見て天晴あつ武士ぶしや万
夫おとこ不當ふたうの姿すがたとハ是等これらをあそいふへけれと先其景氣まづそのけいき
と褒ほめたりけり孝高かうたか者ものして糟谷わら右兵衛尉みぎべゑ友政ともまさの
胤替うぶか里りの弟あに本苗ほんな志村しむらふれとも今ハ糟谷わら助右衛門
尉ゑいと申まをし小寺こてら藤兵衛尉ふじべゑり甥せいふてゆと披露ひらは秀吉
聞きて小寺こてら甥せいとあそハ孝高かうたか不ひ疎そからぬ間まあり
某たれとても等閑とんがらと思おもへ一先見參まづまの志こころる一とて國光くにみつ

大田言三集卷十三
の太刀一振手自取て助右衛門尉と給助右衛門尉其
懇志を悦ひもや此人のため不命を捨ておしから
しと心の中おひひしと之實も大将の士を養ふ
ち一言半句の上よありとハ如期の事をやり給ふ
その後筑前守孝高よりけるも今ハ國中に敵と
ありたり根本の陣を定めんハ有べりら何處
か宜からんと思ふ書寫山よ過たる地あらし其
故いりもと云ふ國の中央の山あるハ何方へも路程
便利ありその上よ山高く峻く分内また相應よ
ひるけれハ大軍を宿せ不便よ併孝高ハ國の案
内者あり此外よまた然るへからん地やあると問

けしハ孝高手を拍て某當國よ生きて國中ハ云よ
及こハ備前美作の境よても徘徊し山川の地理委
細ふことさあへあう書寫山を本城ととへさ深慮
のあやうけるを恥ぢけし仰の如く彼山よと
に可然ハ但別使を遣さるふ及こハ當日推搦よ入
御あうて懇よ僧徒を安堵あさし給へめ兼て
使者と立らしゆら故障とせづくハ不然ハ敵方
へ漏中よさあもあはしとせけるよあう秀吉實
のとおの案内よ及こハ即刻總軍と引て書寫山
よ趣ら本陣を居けし僧徒大ふ恐とあはらうと騒
動しけると筑前守山上山下所々よ札を立堅く亂

大田言三集卷十三

妨狼藉を停止せしめしむるに使番の士を以て時々
 藍坊舎に安堵し珍しき大將軍ありし大軍の内
 一人として軍令を犯す者ありしと實に威嚴
 の行をれしとて老たるも弱も舌を振ふて恐
 怖しけるよしを聞て筑前守の許へ山の老僧を召
 寄秀吉當山に陣を取ると私の所行ありし國中の
 騷動を切鎮め百姓もその業を安んじ商人も其活
 計と遂しめんう為あり然り勿々濫妨の儀あんと
 ありしよしを各に安居し佛事勤行怠るべし
 ひと申渡し黄金百枚を一山へ施行しけし僧徒

等や大悦ひ筑前守り大器ありて財を吝こさ
 ことを感し末代不思議の名將ありと弥あそきて敬
 ひめてありしげう筑前守書寫山と本陣とをこれ
 う軍勢を差向て端城と攻平んと評定あり四月
 三日早天又一万餘騎を引率し書寫山を出馬しけ
 るあし何方へ向ふと云ふことを觸さうしめる集會をし
 諸士あしと怪む互に推量言するものありし
 追あり諸軍勢をてふ次第を定て出陣の螺とありし
 立ける時に至り長井四郎左衛門尉め籠をたる野
 口の城へ向ふべしと下知しけしとてや野口へ
 御さんあしと曳々聲を出して馳たうけり是ハ秀

吉從卒の内は當國の者多くあはれ事早く聞へた
 らんよち敵方へ漏れやせんと思ひし故あるべし
 既して大勢野口へ押寄大手搦手二手より息とも續
 との鉄炮を打掛関を揚攻しめとも長井四郎左衛
 門尉の祓て期し川をさるるに四方の持口油断る
 く馳廻りて下知をあり能戦へとも敵の大勢あり
 へ入替く息を繼城中の小勢あり援の勢の來るも
 見へは次第よ心細く覺へけしは防戦もいささめ
 たるんて見へけるよより寄手のいささ氣力を得一
 時攻み責やふらんと勇にける其中に筑前守の侍
 加藤孫六嘉明とて大膽不敵の若者も身輕よ

早業ありけるは誰とい知を味方の兵士の堀み取
 付乗入んとありける傍へく寄御免ゆへ御先
 と仕るといふより早く其男の肩み手どかけゆら
 ごとと躍といくら堀の上より登りけりその時孫六
 大音み羽柴筑前守の郎等加藤孫六嘉明當城の一
 番乗こ名乗太刀を抜て切て入
 加藤孫六嘉明永禄六年癸亥み生る今年十六歳
 也父を三之丞廣明と云三州の住人ありけるは
 永禄七年一向亂の時三州を立退尾州に來り住
 ると云は嘉明二歳ありて三州を去りて
 秀吉らるるのみ是と見て孫六くくを永續けの共

と下知ありけりこの究竟の壯士三四十人我もくと
堀と乗城とてふ落んとと時長井四郎左衛門尉
今の叶ふと思ひし槽より傘を出し降参し
て城を渡して中間合戦と止らばの様よと呼らう
あうとも此期ふ及び臆病の振舞あくさも憎し不
知顔よて責破とやと寄手頻うみらやとけるを筑
前守堅く制して降参せんといふ許をよとて大
鼓を打せしといひ只今微塵よあそへさ此城を本意
あさとも云ふう大將の下知ありし止とて得と面
面の仕寄の中へ引ひかへ備を立て見ゆあはこを
長井四郎左衛門尉寥々と本陣よ來り筑前守み見

参一族ともの中よまうを無摠御敵よ罷成籠城
仕うゆつち力あく一戦の仕ういと詫言やにう筑
前守も降参神妙の至うあ彌忠功を励まといゆ
此方あも疎意あるまよさ由會釋ありてのち降
参の作法あまの人質を出さるべとあまよ
四郎左衛門尉愛子二人と秀吉の手へ渡しけり
筑前守の本陣よあまを置當城をる長井よ返し堅
固よ守りゆつと下知しその日い書の書寫山の本
陣へ引返は然してのち加藤孫六嘉明と呼出し不
時の賞を行ふとたうこの孫六といふの清正と同
し流の藤原あて利仁將軍の後胤あま共久く民

大関記五編卷十三

間ま下くだり零落れつらくして世よと過とし幼少せうせうよよて父母ふぼと喪さう
ひ他人たにんふ養やしやうられ越前國長崎えちぜんこくながさきに住すし十二歳じふにさいの時江
州長濱えいしゆながはまの馬商人うまあしひの許もとふ知由ちよしして居いたりけりあは
ま孫まご六むう六歳むさいといふ歳父三之丞ちのぢやう病やまひに侵かさるるを
ふ限かぎありける時孫六まごむと枕まくらの元もとに呼よぶとくその方かた
幼稚せうぢあはとも父ちちう末期さいごの言葉ことばあり能覺よきへて成人せいじん
をよ抑某おさへの三州さんしゆの者先祖代々ものせんぞたまたま岡崎おかさきに仕つかへて一
向亂むかみだの其時思おもひの対たいふ御敵ごてきとありて他國たこくよりか
うその方かたいりあもして武士ぶしとあり故主こしゆに帰參きさんを
よと云いふ次第しだいふ聲細こゑこほと終つひに空敷くわがしありしゆる東西とうせい
知ぬ幼子せうしの身みの為方ためかたあり近隣きんりんの人のありのま

越前國へ流浪りうらうける早はや十四歳じふしさいふありけるころ武
士ぶしあなならんふ馬うまをよく乗のりて叶かなはらんと思おもひ
付つけりとも馬うまを持もつたやをゆらゆら如何いかあもし
て馬商人うまあしひふ親おやよりその馬うまと心のまゝに乘のりてんぬ
のとと思おもひ付つけり此長濱このちやうはまの馬商人うまあしひより越前えちぜんふ來き
りし時約束ときやくそくあり終つひふあり來きりしありて商人あしひ
の馬うまを引ひて得意とくいの許もとへ往還ゆきかへるとしていづれも馬うまふ打う
乗のりて馳駢ちせん心のまゝに責せげしはいはしり乘覺のりあきへ並なら
ひあさまでありにり然しかるふ十五歳あはたの秋馬あきうま教あ足たり
と引ひて岐阜きふへゆき織田家おだけへ馬うまを高たかひけるゆその
頃織田家おだけより加藤權兵衛尉かとうごんべゑう景泰けいざいと云馬乘うまのりの鑿め

定とむひと頼とけるあつらひ孫六う引來り馬と
 景泰う馬場へ引往見とけるは景泰一一改め見け
 る内は芦毛の太く逞し無雙の駿足の七寸とら
 うある荒馬あり口強くしてあつらひ乗りの一人を
 あし若殿原天晴逸物めあつらひ褒めうり容易に乗得
 るとめとげといひ只惜敷めのめあつらひひて購
 めのあつらひ景泰うりふ様この馬みぶの癖あり百日
 も厩に繫さすく人あつらひさ勢そのうち静う責た
 らい乗得ることもあつらひとやげといひ孫六大ふ笑
 ひ人の萬物の靈と聞馬いあつらひ鬼ても蛇ても人
 か乗る何の事ういつら其上馬の脚強く達者ある

あつらひと戦場よて無比功を立んすは口強さ荒
 馬ありてあるやうとあつらひ此馬口強しと仰ら
 といつらも我等う乗る何のこもあつらひ猫の様ある
 馬あつらひ御用ふ立やまうとさうと嘲ふ若殿原腹
 と立さらひ汝のうて見とめと云孫六心得馬の側
 ふようやあつらひ鞍をぬり次ふ書をらつら立髪取て
 ひらりと乗股を以て一メあつらひめて馳いつら馬場を
 六七反追廻しつらゆらさびの駿足汗とめさ少し
 柔和と見へし時孫六莞尔と打笑ひ地道三反のう
 廻り元の処と廻し來り静うふ馬を下て轡とうけ
 鞍とひら如何と御覽あつらひと云は景泰あつらひ

感心かんしんなり其方そのほうの乗様のりやう何人なんにんも習まなひしり甚とと以もて奥おくゆ
 め一我宿所わがしゆくじよへきたるへ一其方そのほうも問とべることあり此
 馬うまの某買求まがひもとむへ一と約束やくそくしりるよよろ孫六まごろう悦よろこひ
 景泰けいざいり宿所しゆくじよに往ゆけり景泰孫六けいざいまごろうに向むかひ何者なんものの子こある
 やと問と孫六まごろう守まもり袋ふくろより書付かきづきを出いしと見みゆると取とりて
 こゝに加藤氏かとうしあり景泰けいざいとの始終しじうを問尋とんじんね我われも同
 一加藤氏かとうし其方そのほうと同姓どうせいあり我子わがこ作内さくない今江州長濱けいさうちやうは
 の地頭ぢちう羽柴はしばい筑前守ちくぜんしの許もとにありまゝ筑前守ちくぜんしの家人けにん
 あり加藤虎之助かとうこしゆすけといふのありゆゑも元もとの同
 しめるへ一其方そのほうも筑前守ちくぜんしに仕つかへて大功たいこうを立て能よか
 武士ぶしとありへ一と勸め景泰けいざい小谷こやへ同心どうしんし秀吉ひでよしの

見参けんさんみ入いけるふ秀吉ひでよし其容貌そのようぼう骨節こつせつの人ひとは勝かちとて
 悦よろこび直ちかに城内じやうじやうふとくめ置竹おきたけ中半兵衛ちゆうはんべゐに就つて軍書ぐんしよ
 と學まなぶと弓ゆみと射いさせ刀鎗やうじやうの藝げいと習まなぶと加藤虎之助かとうこしゆすけ
 助すけ清正せいせい加藤作内かとうさくない光泰ひくわいとてゆゑ羽柴はしばいの旗本はたもと行列けいぎつを
 伍ごてと居いたりけるゆゑ今度こんど野口のぐちに初陣はつじんして高名たかなか
 けりゆゑ羽柴はしばいの手ても去者さきもの有ありてゆゑ人ひとも知した
 うけり
 加藤權兵衛尉かとうごんべゐゐ景泰けいざいの美濃國みのくに橋詰庄はしづめぢやう七十貫しちじゆの領りやう
 主しゆありその子こ光泰ひくわい天文六年てんぶん六年丁酉ていゆうの誕生たんじやうあり
 今年ことし天正六年てんしやう六年四十二歳しじふにさいあり
 惟任ただとう光秀ひくわう丹州たんしゆ働はたらかこの事こと

并荒木山城守降参の事

爰ふ丹州八上の城主波多野右衛門大夫秀治を河邊
左大臣魚名公の裔田原藤太秀郷の後胤として波
多野次郎義通の末孫あり元弘建武の頃丹波國を
赤井波多野久下長澤の四家よてあんと領しける
ふ後の細川家の領とありて守護代内藤備前守下
向し國中の政事と取行ひしうら四家の輩との
あしその被管の如くありける應仁の末ふ至り
細川の家亂とあり守護代の威權も行くを波
多野の家は良将多く生れ出て弓矢の威盛ありけ
るふりとも赤井久下長澤の三家を切從へとのち

内藤と打滅し一國全く波多野の領とあり惣領を
い東波多野と稱し八上の城に住し屋形家といふ
庶流と西波多野と稱し氷上の城に住し大将家と
云天文の頃八上の城主波多野上總次晴通と云嗣
子あり故に氷上の波多野刑部大浦秀行の子千
勝丸を養て子とあり元服さとして右衛門大夫秀治
と云今の城主是あり此秀治の同胞の妹二人あり
一人は當國播磨赤井悪右衛門尉景遠の内室一人
は播州三木別所小三郎長治の室家あり又秀治の
弟と遠江守秀尚と号し龜山の城に住をされる丹
波播磨の間一族親類よて割據の勢とあり互に通

好しく威を逞くあしげらふより信長より度々使
者を送りよしとて結びつとも両波多野一度も
上洛と似刺毛利家と隨順し織田家と敵對の色を
顯らしその上別所長治と牒し合せて京都の消息
を伺ひ居らう織田家あてて天正三年越前退治の
後惟任日向守と以て丹波の守護とあり波多野兩
家と討滅し丹波を平均とへしと下知ありしゆら
光秀度く丹波へ働けとも兎角勝利を得さうける
去去年の冬より丹後但馬の波多野旗本の侍共逆
心して波多野と叛く波多野あてて伐んと出陣を
しめる由と聞よし隙ありとあのみ光秀信長へ言

上し龍川長岡等の加勢を得て丹波に亂入し龜山
の城を攻て遠江守秀尚と追出し光秀これに入替
り波多野家と滅さんこととめりけるよ今年四月
波多野の幕下より大坂の城主荒木山城守行重
城に取掛攻戦ひけるゆ光秀城の用水とさうり出
しあてと切落して攻けし行重遂にめふら降
参るあてと弥平次光春り切ありこと安土へ注進
とゆめ信長大に感賞ありて左馬助に改めらる
次即光正とて次右衛門尉あてあさしとけり

重修真書太閤記五編卷之拾三終

大隅言五編卷之三

重修真書太閤記五編卷之拾四

中國勢上月の城と圍む事

并羽柴筑前守後誥の事

浮田和泉守直家へ去年播州上月の城ふ於て真壁
次郎四郎上月十郎矢島五郎七等羽柴筑前守ら為
ふ敗血し刺其身二万餘りの勢を率して後誥を
に筑前守の智略を因て大に敗軍し這々逃歸りし
事と無念と思ひ川ととも一分の力まで再戦あり
ゆへにいろいろふもして此耻辱と雪めんと心掛居け
る処に上月の城より筑前守より尼子勝久并山

大隅言五編卷之三

中幸盛立原久綱以下雲州の諸士と籠置し由聞えしうら浮田思慮を廻らそよ山中鹿助り上月は籠置し定めて作州へ亂入しそよより奮領雲州を取返さんめ為あるべし

上月より大畑ふゆ境の峠を越せし美作國土井驛あり夫より勝間田津山院庄坪井鹿田を経て備中國に至り伯耆日野郡又入雲州富田ふ至

天晴運の盡ぬるめの共りふ尼子ハ毛利の宿敵なりふの出陣とすしとの勢と共に上月と責落さんと

とる羽柴筑前めあはば上月の後援とて馳來ふべし然らハ毛利と羽柴と合戦し及びあんとその勝敗し就て又手段とめくらむへそありと運を兩端ふ掛て工夫とあさんと思案決定して急き毛利家へ使者と送り織田信長の先陣羽柴筑前守秀吉播州み下向し中國へ攻入んとし就中尼子勝久山中立原以下雲州の浪人とも秀吉の下知し從て上月の城に籠置し作州へ亂入し備中伯耆を経て雲州へ切入富田と攻取んとし企圖すと聞えハ急き御馬を出さるへく御出陣延引ふ及ら其勢頗る強大みあり殆御大事とありハらんうと注進とす

右馬頭輝元朝臣此事如何あるへけん吉川小早川以下宿老と評定よ及ふところ今年三月播州の別所小三郎長治織田家よ叛る三木の谷山よ籠城し播州大小騒動とて心を直家のよく悦て二度使者と藝州へ遣る三木の別所謀叛よ因て織田勢近く下向仕る由其風聞いれりて下向のち定めて雲霞の如くゆへ然らんよ上月の城と攻取んとす容易なるまよく一刻も早く御進發の御催ありて然るゆと注進は是よ於て吉川小早川以下毛利家の諸老臣會合して評定しける様尼子の當家の怨敵あるをその從類眷屬

たうとも緩せよあり置つごよありけりり小短や一城よ籠りて本國を取返さんと謀るよ於てと神速よ進發ありて是と攻落あり先考尊靈よ對して孝養の大あるものあるべし然れども信長の先陣羽柴筑前播州よありと聞へ必定後誥とてし當方今よて信長と取合あり今度上月へ向ひおんよ筑前守後誥とてころとあり筑前後誥ふしたるに當方よても又筑前と戦を挑むべし筑前と戦ひのやうに定まるところ内よ信長直よ寄來るべし去り上月を取んと大軍を出して一時攻め取て筑前う後誥の至らざる内よ引取つごこと評定

一決し三月廿八日備中備後安藝周防長門出雲伯耆石見隱岐等の軍勢八万五千餘騎を催し上月城を攻落せしこと出張を

國華万葉に因て考ふるに備中廿二万七千八百九十四石備後廿三万八千八百石安藝廿五万九千三百八十四石周防十六万四千四百廿石長門十三万四千五百九十九石伯耆十三万六千四百九十九石出雲廿万三千四百七十七石石見十二万七千三百七十石隱岐一万八千二百石合すとて百四十九万八千八百五十五石あり織田殿の國の尾張五拾二万石伊勢五十七万二千七百八十六石近江八

拾三万二千百廿石美濃五十八万五千五百廿三石越前六十八万二千六百五十四石合すとて三百十八万九千八十三石この外に五畿内若狭伊賀等小附庸の地あり四百萬石に及ぶと知べし直家大悦ひめくを毛利と筑前守と一戦し及ふへし然して毛利は八万餘騎筑前守は二万三千四百餘騎過し毛利は三家一致を筑前守は只一人今度あを筑前守と追却け播州平均を取返さるべしと小躍して喜ひけるめ又思返し考ふるに筑前毛利と合戦し及び秀吉難義と聞へるは信長あをと援げんと出張せし信長出張といふ其勢十

四五万ふ及ひあんならへ毛利三家と織田家と必
死の戦ひしめて両家の存亡此時あまべけとる暫
出馬と止て両雄の勝敗と見物をとる是のろろ
の孔明う呉魏を戦らめ玄德とて其中を取と
し神策あつと思案しその身の態と病と稱し浮田
七郎兵衛忠家同信濃守戸川肥後守花房志摩守長
船紀伊守岡越前守同剛助明石飛彈守浮田河内守
その外備前美作の諸士を催促し一万五千餘騎ふ
て先陣のさめ毛利の手へ馳加るる四月中旬中國
勢上月表へ發向あまびと輝元を三万餘人あて
備中松山ふ本陣と居らる吉川駿河守元春嫡子治

部少輔元長二男繁澤宮内少輔元氏三男民部少輔
元信とよひ元春の弟毛利少輔十郎元秋少輔七郎
元康即從より山口新左衛門尉隆直三澤三郎左衛
門尉為清同攝津守為廣天野紀伊守隆重枚原播磨
守成重三刀屋彈正左衛門尉久知南條伯耆守元次
小鴨左衛門佐元清以下香河粟屋森脇伊志山縣等
都合二万七千餘人ありとゆ小早川左衛門佐隆
景同舍弟穂井田伊豫守元清一族天野六郎左衛門
尉元政宍戸安藝守隆家即等みろ三吉式部大輔隆
吉平賀六郎左衛門尉元祐清水長左衛門尉長治上
原右衛門大夫元助其外久代小笠原高野福原口羽

渡邊赤川等二万八千余と聞へし又船手よりハ
 村上八郎左衛門尉景廣粟屋内藏元宣野島大和
 守武備浦部兵部丞宗勝以下の海賊衆一万五千餘
 人大船七百餘艘漕川ら移播磨瀧室那波坂越の
 浦々みわけあつて浮田う先陣合とて八万五
 千餘人たつ輝元朝臣の本陣と逗められし三万餘人
 ハ一左右次第進發あつてこの定あり

備中松山より上月まで廿一二里あり

吉川小早川浮田と先陣とて上月と押寄まの関
 の聲と揚あつて天地も一度も鳴動とらぬとあひ
 たつてあんとあつて愚うあつて城中より尼子勝久山中

幸盛立原久綱いりとも一騎當千の勇士あり類を
 以て友とほる習ふとい相従ふ兵士何れも尋常の者
 あつてゆむとといの小城も小勢もて推籠とてこ
 しも恐とて防戦をひかれの寄來る敵を誰あるやと
 見ると毛利の兩川よとて年來待と待とる家の
 仇千騎う一騎と成まても引か引くと勇め合氣を
 勵し力を致して防さけり寄手の方よとて上月の
 城の本人勝久の只尼子の血脉といふ迫あつて萬
 事へ山中鹿助う指麾とる処と知れといふ兩川ひと
 評定し上月の西ある狼山と陣と取是の鹿を喰
 ふのの狼くと云意を以て諸卒の銳氣を助けし

両川の軍勢入替く攻めとも鹿助のよく防戦
 し馳走うて下知しるにう奇手は手負死人の
 負の増て勿く容易く落城をへくも見へるけ
 り吉川元春は今年四十九毛利一家の中より長者
 あるうへ軍慮ふ賢さ良将あり合戦の体をこて
 此城さうとて一日二日あち落すさうそ日数ある
 うちあち羽柴筑前守後誥とて馳來るへ彼ち
 織田家中は肩と並あるのふさ大膽不敵の侍ふ
 してあうも近き書馬山に陣を取てあうと聞さら
 り此方もあつ陣を取堅めて筑前をまのへさうとて
 高倉山の尾續さふ備前勢一万五千と備へさうとて

の側の小高さ処は小早川隆景陣を張らて元春の
 先鋒松原播磨守父子を上月山の下の平地に陣と
 取ととの次の山口新左衛門尉その後の山の峯に
 元春の本陣あり山谷林藪を以て要害とて芝堤を
 築その上は柵を結廻し逆茂木と引さう實も戦功
 謀畧海内を轟らし威名天下に震ふとち羽柴筑前
 守とちやへさ吉川小早川累世武将の門望あるう
 へ何を知識このひ才器人は勝と善代重恩の即從
 虎の如く豹の如きゆの林ふらち野を狭めその負
 七八万及ひ且上月へ元より毛利の分國よりそ
 別所ハ腹心の旗下あり然る筑前守と悔りゆさ

く思ふを以て要害を構ふ戦らるゝて其氣を以て
雌伏するとのふべさあり然るも秀吉ハ書寫山
あうてその勢一万三千餘人その他は當國降參新
附の諸士共あるは別所ハ謀叛毛利の出張も因て
心中両端を懐くものよさ多し然るも秀吉少も恐
れと別所ハ謀叛ハ去あさう上月表と救らる
ち弓箭の名折とありぬへ急は彼處へ出陣と
しと評定とあり小寺官兵衛孝高聲をひそめて中
けるは新參の侍中大め心替りと思はれ然る
も目も餘る大敵は小勢を以て向らとむらん可
然謀は不存ゆま此知は御在陣あうて安土へ加

勢を請とあり安土勢下着の後御援とありて御
出陣ハ共遅うしと諫めしう々筑前守打笑ひさ
ふの目とて秀吉ハ藤吉郎といひさ織田殿の足輕
ありしめ今一國の守護とあり一万四五千の人教
と進退はその間度々の艱難辛苦あり一朝少し
て語り川とくへげんや山中鹿助ハ中國武士の棟
梁あり秀吉臆したうといと口惜うとあり
吉川小早川智慮あうといへとも生立しようの大
將あり足輕より成上りし秀吉ハ心をな知ますと
そ三木の城とて押置早く上月へ向ふとありと
用意とありけるより孝高も心得を氣なわあゆ

ひあうら大将の下知あるは止ことを得と出陣の用意とあしたうけと

秀吉武威毛利勢を却と事

并安土後援の諸將進發の事

筑前守の着到を披見とるは我馬廻り先鋒次鋒の外を小寺官兵衛尉別所孫右衛門尉とらめ二心を存とる國人等々勢を合と一万七千餘人過さうげり秀吉の手分をふとて三千餘人を竹中半兵衛尉重治と附別所孫右衛門尉重相以下忠義の國人二千餘人と加勢とて三木の城を押しとるを殘る兵一万二千餘人を引率して上月表

へ發向

書寫山と姫路の西北に當り書寫山より上月又西北に當りその際揖東揖西の二郡を経て佐用郡の西に行程十里に近し安土へも此由飛札を以て注進し早く御加勢と差下さるべしと言上し秀吉は高倉山に陣を取中國勢を見とるさうら山より川み添林を楯と澤を環し北より南西より東へ折さ透間あさまで立並へたる旗馬印風と靡さ雲と糸花々々を見つるうけり秀吉は毛利の陣を見渡してあふとあとの中國勢や何さよ十餘万の衆あるべし然

ととも如斯要害ふ因て柵を振りの長陣の支度と
知とたり定めて元春隆景の差圖ありて行届さ
たる軍法ありと少時感縁ありけり小寺孝高側
より敵軍とて如斯あうらる加勢の味方到着す
て三日月白旗佐用の山々峯々旗指物馬印あり
と立ちあへば夜の篝を焚けけ大勢の様見とむ
へと勧めりある筑前守めりて打笑ひ今敵陣の
体と見とみそべて實と以て兵と陣縁少くも虚地
ありと吉川小早川の輩思慮ありと故ありて
是を計あり虚を以てとは却て味方心浅く思はる
へく其上は敵を恐る故と推量らんと口惜め

あへり如斯敵よりめりてさるめによとひひ川高
倉山の峯々五色の吹貫瓢箪の馬印と押立と秀
吉ありとありと知とてりとも例の思案凝とる
癖あれいの峯々秀吉むらうらりかの勢とて押
出し何ある計とやありたるらん楚忽とあり
け過とありと敵をいよく備を堅固とあり夢も此
方へありとありと又上月城中ても秀吉あり
まて後誥とて出たりと見々山中立原猛ととも
少く鋭氣を助くべりあり筑前昔よりあり覺
へて軍法よと辭清とて説くこと孝高も半信
半疑いさるあり希代の良将あり凡人の及ふべ

以あふ心よ深くあめひげう又吉川小早川の両
将いんもめふ高倉山の峯を望めを羽柴筑前守の
五色の吹貫翩翩と風よあびさて見へるこ其影
に金の瓢箪の馬印朝日みさうめさてあさうを拂
ふその秀吉の後誥を勢いいうるめうか見て參と
と物見を出して校をとら勢いさつめよ一万三千
よよも過しと注進は西川互よ評定あける當
家らめて織田との對陣あり隨分兵氣と練て進
止の節を正しくあ兵糧玉藥の配を明よあ一人
馬の力をよく養ふべ勝負の大將の心よあうこ
の急くことめると例の持しつめさる元春う指麾

小隆景らめよう羽柴と戦を挑むと好やねを
毛利の陣中よく取堅めいと長閑よ見へたとも
撃めらんとらあめを浮田直家の名代浮田
忠家以下は去年秀吉ふ掛破らして臆病氣のひよ
を醒やらね秀吉の旗馬印を見るところの儘あめ
この恐怖仰天して陣中何となく騒きたらけるよ
川は小早川の先陣三吉平賀の陣色めさ立て静ま
らねる惣軍次第よ周章たち只今よの敵の寄來よ
様よ弓よ捨よとひめくを元春隆景大よ制しこ
めう諸手を乘廻して謚めけと漸よあさ
まうげを上月の城中よても五色の吹貫を望見て

後誥のこめふ秀吉の出陣ありしことを知て銳氣をよ
しあうその際大河流となどは急な渉りて助くる
術もあらずとも筑前守の威勢よおと高倉山の
小勢を知とも寄んともせよ十萬及ふ勢を以て一万余
の陣を徒に守りて手たし由ら流石信長の名代
あか感とぬののあそ無うけよ安土よりてら上月
表の始終を聞召さし御出馬あつて叶ふやうとて荒木
攝津守村重は先鋒を仰付らしける此頃村重信長とら
らむる子細あるやうて謀叛さるやとおのふ処へ上月
後誥の為は信長下向あるべしと聞序らるしとおのひ
しめらやの何事あると体よて出陣し秀吉の高倉山よ

至り信長の仰で傳へし秀吉も陣中大に氣力で増然ハ毛利の
陣へ押搦て一合戦をこゆとゆひらるる村重めら禁め程は信長下
向あるべしとのち合戦ありて遅うしと云ふらう秀吉是非なく
村重も異見は從ひ信長出馬をせらるる村重も体不審と目をつける
に心得ぬと多かりた此者毛利と合陣を反射由々敷大事あるべしとあ
めつ村重も心を取と中つて居たりけり安土より荒木を下しむ
ひのち五月朔日龍川惟任筒井武藤以下一万余騎と差下さし其
後より北畠信雄神戸信孝佐久間右衛門尉信盛長岡兵部大輔藤孝氏
家左京亮稻葉右京亮安藤伊賀守蜂谷兵庫頭以下一万余騎よて發
向さむ此勢五月六日より十日迄の間は惣軍のとり高倉山よ著陣
とらぬ筑前守の勢四万七千餘騎ありはるるれとも龍川惟任

佐久間の面々心々軍機と持しつゝのめくそ合戦をうけしうしと思ひ
けるふより惟任三木の城を押し竹中重治と安土との羽柴
胸中の機密と言上り及ひけり

残太平記六月毛利吉川小早川六万餘騎を佐用上月両城を攻
しうの秀吉使者と走を加勢を乞ふより信長信忠佐久間瀧川一
万五千と授けりて救を乞ふ信忠高倉山に陣はるとして
吉川元長二万餘騎を以て高倉山の後廻る信忠佐久間瀧川恐
て書寫山へ引返はりしとより上月落城尼子兄弟討死し山中幸
感生捕とて信長怒り信忠益を誅せんとの信忠を以て耻別
所を伐て東播磨八郡を取らる為東播磨發向と云

重修真書太閤記五編卷之十四終

重修真書太閤記五編卷之十五

竹中重治為秀吉安土へ參上の事

并惟任光秀信忠卿異見の事

毛利三家の大軍播州へ出張し上月城を攻るふよ
う羽柴秀吉加勢を安土へ請奉りしめ信長出馬
あるへさ由仰出され先鋒とて荒木摂津守村重
と差下されしと續て北畠神戸佐久間瀧川惟任
長岡氏家稻葉安藤等都合二万五千餘人追々彼表
へ下着し川上村重の内々信長を怨むふ子細
あるふ依て催促し從ひ先鋒み加らんとすも戦を

欲^りと^り佐久間龍川以下^り秀吉の指麾^しに従^らふことと
忌^めう故^ゆ後誥^ごこ^して陣頭^{じんとう}ふ會^いあり軍の調略^{てうりやく}
と意^いと^り秀吉諸將の意^いをよく知^らう故^ゆ竹中半
兵衛^{へいゑい}を以^{もつ}て使^{つか}と^り安土^{やすち}ふ差上^{さしあ}と^りけし信長^{のぶなが}ふ
も西國^{せいこく}の事^{こと}心元^{しんげん}あく思召^{おもひめ}さ^する折節^{せつせつ}あ^らし神速^{しんそく}
ふ召出^{よめだ}さ^すと如何^{いか}ふ^くと^り付^{つけ}あ^らし重治^{しげち}謹^んて言上^{ごんじやう}
しける^り別^{べつ}所^{しよ}謀反^{ぼはん}の^りめ如斯^{かく}毛利三家^{のぶらねさんけ}の出^い
勢^{せい}ハ斯々^{しか}こ次第^{しだい}委^あく演説^{えんせつ}あ^らし然^{しか}して後筑前守^{のちつくぜんしゆ}取^と
あ^らし高倉山^{たかうくらやま}まで出陣^{しゅつじん}あ^らしゆ^へこも無勢^{むせい}ある^りふ
より加勢^{かせい}と請奉^{こみたま}う^り処荒木^{あらかき}以下^{以下}大勢^{たいせい}下向^{げかう}仕^しゆ間
早々^{はやはや}合戦^{くわせん}仕^しる^りと^り処諸將^{しよしやう}の心區^{しんく}々々^{しや}と^り一和仕^{いつわし}

ら^らしその中^{ちゆう}も^も心得^{こころえ}の^り体^{てい}の^り容易^{ようい}と合戦^{くわせん}
仕^しる^りゆ^ゆ味方^{あじかた}却^{かえ}て難儀^{なんぎ}ふ及^{およ}びゆ^ゆらん^{らん}早く御^ご
出馬^{しゅつば}あ^らし諸將^{しよしやう}を御指麾^{ごしゆゐ}ゆ^ゆ合戦^{くわせん}ふ於^おて味^{あじ}
方の勝利^{しやうり}疑^ぎある^りゆ^ゆと申^{まを}ふ^り信長^{のぶなが}の^りさ
ゆ^ゆ毛利三家^{のぶらねさんけ}大勢^{たいせい}まで出張^{しゅちやう}と^り間^ま其氣勢^{ききせう}如何^{いか}と
問^とと^りあ^らし重治^{しげち}其儀^ぎの先達^{せんたつ}て注進^{ちゆしん}し奉^{たま}ふ^りと^り海
陸^{りく}の寄手^{よて}八万五千餘騎^{はちまんごせんごじゆき}と^り大将^{たいしやう}輝元^{てるもと}の旗本^{はたもと}三万
餘騎^{ごじゆき}の^りと^り上月^{うづつぎ}より二日^{ふたひ}隔^へて備中^{びちゆう}松山^{まつかやま}に陣^{ちん}を居^ゐ
ゆ^ゆあ^らし輝元^{てるもと}を叔父^{おぢ}二人^{ふたり}の進退^{しんたい}を守^{まも}り叔
父^{おぢ}二人^{ふたり}の互^{たがひ}に斟酌^{しんさく}しゆ故^ゆ獨斷^{どくだん}の活機^{かつき}あ^らし去^さ
輝元^{てるもと}の若氣^{わかし}血氣^{けつき}の勇^{ゆう}も施^ほしゆ地^ちあく又吉川^{よしかがわ}の智^ち

小早川の勇も東と兼西と避けよう大事の圖を対
 しての事數見覺へし既に此度對陣の張様を見ゆふ
 只面々の持場くゞゞに棄ちしとふ中ゆつゝも猛こと
 と致しゆ故切放したる働さ更にあく軍を成程丈
 夫不仕ゆこと芝堤を築柵木を廻し要害をめぐ
 恰も堅城の如く用意とゞゞ強長陣の為のこゝも
 もゆまゝ一夫も漫費さぬ一木も等閑に棄ま
 しとのこ計られゆ体あてゆへて合戦と持て持と
 こゆへくゆ但毛利の兩川の上のこゆへて秀吉
 如何様もの力と盡し切勝てゆゆへとも加勢のこ
 め差下されし味方のうち心得ぬゆゆへて御

下向ゆて御穿鑿有べく存ゆ小より重治ること参
 上仕ゆと言上しげとい其旨趣もゆゆへて聞召した
 う但三位中将殿を名代とゞゞ下向とゞゞむへて惟
 住五郎左衛門尉長秀軍の事とら筑前守と共相
 談とへさふと仰らとて五月七日三位中将信忠
 惟住五郎左衛門尉長秀三万餘騎とて安土と進發
 あうそのちち重治と近くゆされ信長聲を低く
 て仰らとげゆ毛利三家の者信長と仇とおめゆ
 由もあくまゝ彼輛とやらんよあゝとゞゞ將軍と
 取立まゆとる意もあく祖父元就切廣ける國
 とたよ失ふゆと思ふゆ本意と知とゞゞ又兩川の

意の國と争ひ地を奪らんため民の業を妨げ士卒
と勞をこゝ大将たるものゝあきへんことふあらし
あゆふこと鏡よあけと明らあう今度出陣せし
尼子山中あんとと深く疾よあめへち秀吉う別所
と軍隙あく後援の便宜も行届うぬうち上月を
攻抜んとあゆふて寄來うし秀吉いちちやく出
陣とて以て要害をぬき只よく守りて秀吉う
心を伺ふのこゝし秀吉搦らぬし兩川も又あし
ふことあし兩川元よう戦をむめととるあし秀吉
か小勢よて高倉山よあるを討ぬといふことあ
へし尼子兄弟い彼等う仇あり彼等二人う尼子兄

弟よ負うか尼子兄弟う彼等二人ふ討うか二の
道を出ぬうちあ互よ軍を引へうし秀吉と此意
のあしをあし始う二人の陣へ手遣ひもせぬあ
ととて何故よ加勢をや越しとといふよ是はた
氣と勢のためあしと合戦のためあしぬあう是
等のことい重治もよく存知の上あし今あし
く云よ及んぬ心得ぬのしひとあし村重あし
へし村重この日頃胸中よ不快を懐くことあしそれ
仰らしむこと重治とてふ知州らんさて村重兩川
と牒し合えし秀吉と討んとあゆふあし因て
兩川へ内く使節と立し秀吉と破あしといひ川

ととも兩川を實とを以て却て計あらんと推量
しいふく壁を堅くして出さるはもう村重もた
うと失ひこのこと顯くやさんと安さ心いあるま
しとて之をば秀吉うち処とくよう心得ささめ
る更遠慮及ては仰らまはるよう重治も
左様小思召といらんより秀吉うち心と同く
符節を合さしと悦ひて安土と御暇中
たの播州へ下向は

流布本此一節大に秀吉信長毛利三家の意に及
と今一本に因て改正は
叔も高倉山後援の惣大將軍とて三位中将信忠

三万餘騎あて播州へ下向より一軍の進退を羽
柴筑前守ふ任とらるるといへとも筑前守り心
定めぬとこのあゝん時相談のさぬ惟住五郎左
衛門尉長秀と差副らるる由仰出さると同く播州
へ下向あり秀吉高倉山より三位中将殿の下
向あり由を聞かぬ御迎のため宿老小郎等共
ぎ添姫路より出さるる中將殿對面より
秀吉此日頃の心配さそりと思召を併遠くは
本意ありあへさありと申して御迎の老より暇を
とらけるあまう何も高倉山へ走り歸り中將殿の
御錠と傳へけし秀吉但打笑あてのこを居さる

ける高倉山の陣中よてい只今總大將軍の御下向
あるいさふ御座の設おとち無うけるあう如何
かしむふへこと宿老の即等とも秀吉の前よ出て
差圖と請い秀吉いゆとよ中將殿あ、追い御入あ
ふゆいさあり書寫山よ滞留ゆいゆい川るあらん
御座の設よ及むいと云て事もかけよを居たりけ
る實も信忠長秀書寫山よ入て休息し當山ハ三木
へも程近し高倉山へも一日路あり爰と本陣をか
しむふへことあうこの御沙汰よて惟住五郎左衛門
尉長秀よ美濃尾張の軍勢二万餘人とてつて高倉
山へ差下さる長秀既よ高倉山よ到着し秀吉の勢

ふ加ららるるしうら大形中國勢と對こあういそ一
戦と催ふをへと秀吉あさうよいうたそとも佐
久間瀧川更よ戦とこのまの總大將下向まはる
いよの御下知あくし漫よ軍とんと後勤その恐
とあうこと打立派バ秀吉も為つと様あく此上あ
夜討あとのあさ為晝夜の番とよくし我陣を堅
く守るふ如しと獨りふやさ用心しけい村重も
いよく本意あく斯て兼ての約束よ相違をこと
と悔めとも又打出して語らふへと者もあけい
胸をいよめて時あをらと伺ひ居らう是ハ村重
う一族あうける丹波の荒木山城守と攻らとける

時信長上方侍る心の知ぬものあり昨日ハ味方今日ハ敵たとく鷹の如く飢ハ主人の用よたら肥とは己の心のまゝに冲ふの村重あんと何時敵とあらんも計らとを山城守もらめを左ハあつと宣ひしを障子の蔭よて立聞と何の心の付ぬあつて御前へ出けるよ只今仰らと聞ふと後ハ心許ありと宣へる村重あつと治め斯有御諛ハ口惜く存ハ摂津守あんと赤心ハ二心ある侍よといぬのと言上と何とありあど村重ハ二心あるとは池田民部と難面

めてふと退しはらあつと仰らと村重赤面して退出しけるか此大將の心中頼母と始めて思ひとゆと因て丹波の波多野三木の別所と内々合と又高倉山よて両川と羽柴と軍とらその時裏切とんと約束しとも両川元より故ある戦ひとこのまの隆景ひとら羽柴と軍たてを感心あり近代ありこの侍ら我あつと鋒を争ひあつと由ある軍と怨を深く仇と助くる國を治むるの心よあつと殊に此陣よて村重一人裏切るとも猶あつとの加勢下向川と其の詮あるまゝとの上信長やうて下向

あるへ〜又信長とら〜めての軍よ左様の腹黒く
 た〜る毛利の耻辱こそよ過比とて村重の使を返
 しけるあ〜荒木も望と失ひ秀吉へみの事のと
 のや仕はらんと安さ心もふ〜〜鬼角をさう
 ちよ竹中重治も返り来り安土の首尾を委細よ語
 又信長内話あり〜とを筑前守へ具よ告げるよと
 秀吉もら〜めて安心〜殿を荒涼の本性よて渡を
 めへ秀吉軍もとて對陣の〜よ日を暮とて
 云甲斐あり〜と覺〜ゆらんとおのよと以て加勢を
 請〜ゆ〜ふ村重を下されたり此荒木心さま油
 斷あり〜とおのひ〜ゆ益あり〜加勢を下され〜

ののゆあと思ひ居たり〜殿の左様よ思召けん
 との努力知さう〜然る殿の爰許へ下さ〜も亦
 遠慮のあり〜る〜好々秀吉うおゆ
 処も殿の御心も毛利三家の者の心よて如斯〜
 致〜〜世よも不思議の事よの〜嗚呼天時と地
 理よ如と地理の人和よ如に尼子勝久のう様よお
 のよ共毛利三家と鋒と争ふべ〜んやといへ〜重
 治も何様安土よても毛利と戦とこのよをよ
 毛利三家も貴殿と軍と挑む心あり〜貴殿も軍を欲
 とを〜と〜毛利の出勢を〜の尼子兄弟の上
 の〜〜て貴殿も安土も戦を專とあると〜

彼兄弟を助くるみ厚うらうと知る天の廢るる処
人そとらと如何うとんと云て歎息し止は秀吉
あふうらうまの人の聞んそれらうの竹中とや
く書寫山へ参向し中將殿へ上月表御出陣の事を
勧め奉るへ中將殿御着陣ありゆめくこの高
倉山の陣頭威勢さうんみあるへとやけうふよ
う重治直し書寫山へ参上し信忠卿と謁て安土よ
ての御説を言上し早く上月表へ御出陣あるへと
様筑前守あるへ願ひ奉る由を演説ありゆめは
信忠卿聞食て我も左のあゆめとも三木の敵徒も
容易うらゆめ某上月表へ出馬とやそのあとへ

別所一黨打て出神吉志形の者とも味方の後を立
切ゆゆ大事あるへと故この処は陣を
定て上月表と別所の三木城とと押あるうと仰
らとけるあう重治のさゆ此度らめて毛利
との御取合よ軍の進退御指麾あくゆめあま
しゆ三木の事も大切ゆめさう事御尤
ふゆへとも是ハ小敵あり彼ハ大敵あり大小同
あうび小を捨て大に向をゆめんと必然の道
理うと存奉る由を再應のへうら中將殿仰らと
ゆる様重治のゆめく処實み理あれとも安土よ
て殿の仰らとみ急な戦ありとありと戦ゆゆ

ての為安一戦るべしと敵を勞うさん最上の策
 ありてあるべしとよく心とよと御下知ありしと
 とい某上月表へ出馬をば諸將必戦を急くべし因
 て出馬を見合あるべしと仰らるるあつち重治心
 中ふ安土よてい戦を好まをむとぬとも上月表へ
 出馬をさるるさるる事と仰らるる事との事とお
 のひつととも又あつちめへ勧め奉るるさるるあ
 ら糸を口を箱で退出を蓋信忠の上月表へ出馬し
 かくさるる事とい佐久間瀧川惟任等陣取の事よ
 て羽柴と意趣合を互に偏執して相猜忌をその本
 と尋ねるるに惟任丹州征伐の命とうけて既に二三

年ふ及へるともいふ其功を遂げ然るに秀吉播州
 と平治して勲功や高くその上は毛利と一戦し
 ては是は勝とを得るまむ其功名もみせし
 響る武威ありふあつちあつち一是弟一光秀う嫉
 まるる忌むるとあつちあつち因て佐久間瀧川は
 説て合戦を遅くさむ瀧川佐久間元より秀吉の
 麾下よあつち軍をんことあつちぬら光秀う云ふ
 ろうて軍を出さるる信忠卿下着ましあつち
 めん定めて秀吉うやに因とあつち合戦を急うる
 ありんと推量し光秀書寫山の御陣へ参上し信
 忠卿ふ三木の押あを大切よと言上し上月表の

出馬と支えし之信忠卿よりめりし光秀村重等
の意中を疑ひあふ果して如斯ありしゆら
て信長の御諛ありし処と同一こと符契の如しと
密使を安土へ上ることて逐一注進ありあふ

熊見川合戦の事

并福島正則高名の事

四月も過五月も暮六月に至りし毛利の西川羽
柴筑前守と對陣のこみして互に軍を挑まじ暑氣
いよいよ頃よてあり佐久間瀧川氏家う士とも朝
こふ馬と冷し熊見川へ下りけるを見て中國勢の
内より逸雄の兵士等は討んと云合を五百餘人

榊原竹林の蔭に埋伏し伺ひ居たりけるふ十七日
の朝佐久間氏家う兵士五十人許例の如く馬を冷
し手水遣ふとて居ける処を見をまじ中國勢五
百餘人むらくと起り立鉄炮を打掛矢庭は五六人
打倒しけし氏家左京亮眼前は味方の兵を討そ
ありしああると云はば一千餘人まで馳付中國勢と
馳立し吉川小早川益ある鬪争を起し互に傷く
この淺間し程より手早し引揚はんと下知しけ
しハ枚原父子三人吉田実戸川口香川森脇新見以
下一万五千餘人まで打出し佐久間瀧川安藤筒
井氏家と助けし一万四五千板と下りし馳落し氏

家勢と操引よひうとける処へ中國勢の内より
南條小鴨くもをめぐり上方勢あかに喰付手稠く攻め
ふと秀吉折節荒木陣ちんにあうて是と望み見あは
見あへ味方の兵士無法の軍つとして引口難義なんぎに見あは
ふあり早御向ひありて引あけあき某も跡より参
るべしといひそそ立あうといひ村重むらむねより
ふ駈あらしといひ羽柴はりぢより手より中村孫平次なかむら一氏
打てあつて中國勢二人を討取へ中村討をふ續け
續けと神子田半右衛門尉蜂須賀彦右衛門尉宮部
善祥坊以下真一文字まことより押寄けるあり南條小鴨
立あしもあき敗走くわいそうし秀吉も五色の吹貫ふきぬきを山風やまかぜより

吹あひうと瓢箪ひょうたんの馬印うまいんあり立て中國勢ちゆうこくせいに切あき
とけるふ加藤清正同孫六嘉明同作内光しんくわう福島片
桐堀尾脇坂糟谷助右衛門平野權平長泰藤堂與右
衛門尉一柳市助等真先まきより切立しうる中
國勢の中より今田中務香川兵部引返しよく戦ひ
しう共吉川小早川堅かたく制してあはと引揚ひきあげるふ
しう中國勢心のころして引退ひきひげし秀吉もすし味
方を制して追おしめし然るふ福島市松只一人深々
と進すすみ入南條ななぢより即等末石彌太郎を討て首を取ん
とあける處へ南條小鴨の勢共うへ合しうる
又踏込ふみこんで戦ひけるを秀吉下知して引くへしける

共我突ふと敵の首を取ぬ法やあるといひあが
 ら敵の中へ駈入けるを見て福島う即等星野又次
 郎相共ふ大勢の中へ走入遂ふ末石う首と取て
 とうへふ不敵あうける振舞やと感とぬゆのあそ
 あうけ

重修真書太閤記五編卷之拾五終

